京都市立東総合支援学校

令和７年度　前期学校評価について

令和７年１１月１７日

前期「学校評価アンケート」にご協力をいただきありがとうございました

前期学校評価アンケートは、Ｆｏｒｍｓのアンケートで行い、保護者・児童生徒・教職員の回答結果を基に、前期の取組について分析をしました。

紙面では、今回の結果と分析、学校の取組内容や改善策等について記載しています。今回の結果は、全教職員で共有し、課題改善に向けて取り組んでいきたいと考えております。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

＜前期学校評価のねらいと方法について＞

（１）ねらい

◎今年度の学校経営の重点項目に沿って、教職員・保護者・児童生徒に対してアンケート調査を実施することによって、前期の取組に対する達成状況等を明らかにする

◎達成項目や課題項目について、教職員・保護者と情報共有し改善に向けて取り組む

（２）アンケート実施方法

◎　調査対象　　：　児童生徒、保護者、教職員

◎　時　　期　　：　令和７年９月上旬

◎　回 答 者　　：　児童生徒、保護者（１家庭に１枚）、教職員

◎　調査方法　　：　３つの選択肢（児童生徒：はい、いいえ、わからない　保護者：できている、できていない、わからない　※教職員は２つの選択肢：できている、できていない）の総数に対して数値を出し分析しています。

（３）回答率

	児童生徒	小学部保護者	中学部保護者	高等部保護者	教職員
回答数	77（137）	36（47）	16（25）	39（64）	117（117）
回答率	―――	76．6%	64%	61%	100%

（４）アンケート結果

◎「いのち」「よりそい」「つとめ」「ひろがり」「つながり」の重点教育目標別に項目をまとめました。

◎児童生徒アンケートは肯定的回答、否定的回答、わからないの回答を掲載しています。保護者アンケートは学部ごとに（上段）肯定的回答、（中段）否定的回答、（下段）わからないの回答を学部ごとに掲載しています。教職員アンケートは肯定的回答、否定的回答を掲載しています。

◎実現度の高い（90%以上）項目（青）と、低い（60%以下）項目（赤）に着色をしました。

「いのち」子どもの命を守り切る					
児童生徒			肯定的	否定的	わからない
1	小	学校は楽しい	88.3	2.6	9.1
	中高	学校に安心して生き生きとできる時間や場所がある			
2	小	自分や人にやさしくしている	83.1	0	16.9
	中高	自分や人を大切にしている			

3	小	安全に過ごすための学習をしている	83.1	2.6	14.3
	中高	安全に気をつけて自分の命を守る行動をしている			

保護者		小学部	中学部	高等部
1	学校は、子どもが安心して生き生きと学べる環境を作っている	91.9 0 8.1	87.4 6.3 6.3	94.8 2.6 2.6
2	学校は、命や性に関する学習を通して、自分や人を大切にする力を育んでいる	70.3 0 29.7	75.0 0 25.0	71.8 2.6 25.6
3	学校は、安全、防災・防犯に関する学習を通して、自分ができることや心身を守る力を育んでいる	81.1 0 18.9	87.5 0 12.5	74.4 0 25.6

教職員		肯定的	否定的
1	子どもが安心して生き生きと学べる環境を作っている	99.1	0.9
2	命や性に関する学習を通して、自分や人を大切にする力を育んでいる	99.1	0.9
3	安全、防災・防犯に関する学習を通して、自分ができることや心身を守る力を育んでいる	99.1	0.9

【「いのち」子どもの命を守り切る】

１の項目では、全てのアンケートにおいて、90%近く、もしくは 90%以上の高い数値となっています。この結果から、児童生徒が毎日安心して通学し、学習に臨めていることが伺えます。児童生徒が困ったときに、学年・学部の教員に相談する姿や様々な場面でクラスメイトや学年の友だち、他学年の児童生徒と一緒に笑顔で活動する姿が見られます。今後も引き続き、児童生徒が毎日安心して学校に通えるように、教職員全員が、児童生徒一人一人の様子に気を配り、その場に適した指導・支援を行なっていきたいと思います。

２の項目では、児童生徒、教職員の肯定的回答は 80%の高い数値であるものの、保護者の肯定的回答は 70%台「わからない」の回答は 20%台となっています。また、児童生徒の「わからない」の回答も 16.9%となっています。今年度からイーストスタディ「命や性の大切さを知ることにつながる学習」として教育課程に位置付けています。小学部では、手洗いや歯磨き等身の回りの清潔、男女の身体の違い、プライベートゾーン等についての学習に取り組みました。中学部では、清潔な身体、人との距離感、生命の大切さ等について学びました。高等部では、思春期の心の変化、二次性徴、パーソナルスペース、男女交際、性被害の予防等について学習をしました。どの学部でも、人形やイラスト等の具体物を使った取組やロールプレイや場面を設定した取組により、授業毎に行う振り返りでの児童生徒の言動や意識に変化がみられるようになってきています。今後も引き続き、「何のために」学習しているのかを児童生徒が実感し、自分自身のことを労わったり、友だちや周りの人のことを考えたり、思いやったりする気持ちを育み、自ら行動する姿を引き出していきたいと考えます。学習したことが学校の他の場面や家庭・地域で自ら行動できるように、日ごろから保護者と相談・連携していきたいと考えています。

３の項目では、児童生徒、教職員の肯定的回答は 80%の高い数値であるものの、保護者の「わからない」の回答が 10%～25%となっています。今年度からイーストスタディ「安全な生活を送ることにつながる学習」として教育課程に位置付けています。避難訓練は、前期に「火災」「土砂災害」を想定し実施しました。小学部では避難訓練の事前学習として「押さない」「話さない」等の基本的な避難の仕方や、「ハンカチを口に当てる」「低い姿勢をとる」等の火災時の避難の仕方等を学び、実際に学んだことを生かし避難訓練で自ら行動する姿がありました。中学部では、校舎内の避難経路の確認で誘導灯を探すことや、地震が起きた際の行動のとり方として、机の下に頭を隠すこと等について学習しました。今後も防災に対する意識を高めていくために、学習を積み重ねていくとともに京都橘大学防災サークルと連携していきたいと思います。高等部では、防災バッグの中身を知ることや廊下の見通しの悪い個所に注意喚起のカードを掲示すること等に取り組みました。さらに、東陵高等学校と連携し学習を行いました。避難所などで使用する段ボールベッドを組み立て実際に横になってみたり校舎内の危険個所を探したりすることで、災害時の対処や安全について体験的に学ぶことや、防災カードゲームを通して、災害時のトラブルを解決することを考え、災害時の対処方法を知ることに繋がりました。また、各部ともに日ごろから「生活安全、交通安全」についても学び、有事の際に落ち着いて適切に行動できる力を育んでいます。今後、学校以外の家庭・地域等でも安心安全に行動し、自分を守る力を身に付けられるよう家庭とも情報共有し取り組んでいきたいと思います。

「よりそい」誰一人取り残されない教育を進める					
児童生徒			肯定的	否定的	わからない
4	小	色々な先生と学習や活動ができてうれしい	87.0	2.6	10.4
	中高	色々な人と関わったり活動したりしているので安心して過ごしている			
5	小	やりたい学習や活動がある	83.1	2.6	14.3
	中高	自分から挑戦したり、考えたり、行動したりする学習や活動がある			
保護者			小学部	中学部	高等部
4	学校は、複数担任制等、全教職員で子ども一人一人と関わり丁寧に寄り添っている		86.5 5.4 8.1	100 0 0	86.5 0 13.5
5	学校は、一人一人のねらいに合わせた「個別の包括支援プラン」を基に、子どもが意欲的かつ主体的に活動できる授業を行なっている		78.3 2.7 18.9	93.8 0 6.2	82.1 2.6 15.3
教職員			肯定的	否定的	
4	複数担任制等、全教職員で子ども一人一人と関わり丁寧に寄り添ってる		98.3	1.7	
5	一人一人のねらいに合わせた「個別の包括支援プラン」を基に、子どもが意欲的かつ主体的に活動できる授業を行なっている		93.2	6.8	

【「よりそい」誰一人取り残されない教育を進める】

４の項目では、肯定的回答が全ての項目で 80%を超え、特に教職員の回答は 98.3%とたいへん高い数値となりました。全学部で複数担任制を導入して２年目となり、全教職員が学部や学年に関係なく、全ての児童生徒に関わり、寄り添うという意識を持ち、日ごろから指導・支援を行なっています。今後も、児童生徒の多様な能力や個性を伸ばせるよう、複数の視点で一人一人に丁寧に寄り添い、個に応じた適切な配慮や支援を充実させていきたいと思います。

５の項目では、保護者の肯定的回答は 80%近く、もしくは 80%以上となっていますが、「わからない」の回答が、小学部 18.9%、中学部 6.2%、高等部 15.3%になっています。子どもを「できる存在」として捉え、個別の包括支援プランを基に児童生徒が「意欲的かつ主体的に活動できる」ように、学習内容や支援を工夫した授業実践を行なっています。児童生徒は少しずつ、進んで課題や作業に取り組んだり、「もっとこうしてみよう」と考えたり、質問に対して言葉を選びながら返答したりする等の姿が見られるようになってきました。今後、「何のために学ぶのか」「何ができるようになるのか」「何が身についたのか」をより明確にし、「意欲的かつ主体的に活動できる」授業実践に向けて、校内研究や教員の専門性を高め指導内容や指導方法の精選・創意工夫することに取り組んでいきたいと思います。

「つとめ」職責の自覚、研鑽、教育の質を高める					
児童生徒			肯定的	否定的	わからない
6	小	先生は優しく教えてくれる	81.8	3.9	14.3
	中高	先生は丁寧な言葉づかいや態度で教えてくれる			
7	小	ＩＣＴ機器（アイパッドやスイッチ）を使って学習している	84.4	6.5	9.1
	中高	自分の生活に生かせるようにＩＣＴ機器（アイパッドやスイッチ）を活用している			
保護者			小学部	中学部	高等部
6	教職員は、「教員の言動そのものが教育である」との認識のもと、子どもの人権を守り、一人一人を大切にしている		78.4 0 21.6	81.3 0 18.7	74.4 0 25.6
7	学校は、子どもが主体的に学べるように、ＩＣＴを活用して生活に生かす力を育んでいる		48.6 0 51.4	68.8 0 31.2	69.2 0 30.8
教職員			肯定的	否定的	
6	「教員の言動そのものが教育である」との認識のもと、子どもの人権を守り、一人一人を大切にしている		98.3	1.7	
7	子どもが主体的に学べるように、ＩＣＴを活用して生活に生かす力を育んでいる		84.6	15.4	

【「つとめ」職責の自覚、研鑽、教育の質を高める】

６の項目では、児童生徒、教職員の肯定的回答は 80%を超え、保護者の肯定的回答はそれぞれ 80%前後となっていますが、保護者の「わからない」の回答が 20%前後となりました。日頃から、児童生徒に対し、全教職員が人権を尊重した言葉づかいや態度を意識しながら接しています。それにより、児童生徒、教職員の肯定的回答の数値が高くなっていると考えています。クラススタディでも教職員が「挨拶」「仲間意識」「相手を思いやった言動」等についての姿を見せること、児童生徒自らが気付き、廊下で教職員とすれ違う際に「おはようございます。」と自分から挨拶をする姿や、「○○さん、一緒に行こう。」「○○さん、休んでいるね。」という言葉が聞かれたり、困っている友だちに手を差し伸べる等、友だちを意識した様々な言動が増えてきています。今後、イーストスタディ「人権意識を育むことにつながる学習」や 12 月の人権週間等の取組で、自分がより良く生きるための方法を得たり、お互いの生き方や価値観の違いを認め合い、ともに尊重しながら協働していこうとする姿を育んでいきたいと考えます。

７の項目では、児童生徒、教職員の肯定的回答は 80%を超え、保護者の肯定的回答はそれぞれ 40%台～60%台となっています。また、保護者の「わからない」の回答は 30%～50%と高い数値になっています。各部の児童生徒の様子や実態により、タブレット端末を使用する頻度や機会は異なっていますが、小学部では、朝や帰りのスケジュールを児童が確認をしたり、個別課題学習として文字や数字の学習をしたりしています。さらに、文字や写真や動画を編集して、修学旅行の壮行会で発表していました。児童が自ら操作し学習している場面や頻度が徐々に増えています。中学部、高等部では、自らの意見や考えをまとめグループ内で共有したり、プレゼンテーションをしたりして、思考力やコミュニケーション力を育んでいます。また、タブレット端末の視線入力機能を使い意思表示したりしています。生徒たちは、あらゆる学習場面でタブレット端末を使用し、身近な学習ツールとして活用することにつながっています。各学部、デジリハを活用することで、友だちの様子を見てやってみようとする姿や腕や身体を伸ばす姿に繋がっています。

今後も、児童生徒の「もっと調べて知りたい」「もっとこんなことをしたい」という気持ちや態度を、タブレット端末をはじめとするＩＣＴ機器を活用することで効果的に育み、「主体的に学ぶ」姿を引き出していきたいと考えます。

「ひろがり」社会に開かれた教育課程の実現					
児童生徒			肯定的	否定的	わからない
8	小	色々な人と出会い、たくさんのものを見たり、感じたりしている	76.6	2.6	20.8
	中高	自分の力を発揮して、色々な人と関わり活動している			
9					
保護者			小学部	中学部	高等部
8	学校は、豊かな自然と地域資源を活用し子どもたちの世界（視野や経験、意識）が広がる学びを取り入れた授業を行なっている		81.1 0 18.9	87.4 6.3 6.3	71.8 0 28.2
9	学校は、すぐーる、ホームページ、配布物等を通して、活動のねらいや子どもたちの様子等の情報を発信している		97.3 0 2.7	93.8 6.2 0	100 0 0
教職員			肯定的		否定的
8	豊かな自然と地域資源を活用し子どもたちの世界（視野や経験、意識）が広がる学びを取り入れた授業を行なっている		85.5		14.5
9	すぐーる、ホームページ、配布物等を通して、活動のねらいや子どもたちの様子等の情報を発信している		88.0		12.0

【「ひろがり」社会に開かれた教育課程の実現】

８の項目では、児童生徒と高等部の保護者の肯定的回答が 70％台、小学部、中学部の保護者、教職員の肯定的回答は 80％を超えています。学校周辺の地域を散策したり公園に行ったりして、自然を感じたり体を動かしたりしています。大塚小学校との学校間交流や東稜高等学校との交流学習では、同年代の児童生徒と一緒に学習する機会となり、毎回、有意義な学習の場となっています。また、山科区の社会福祉協議会での園芸作業、利用者の方々への接遇、大塚児童館、音羽児童館での乳幼児教室や清掃作業、山科苑での清掃作業等の地域資源を活用しながら学んでいます。それぞれの施設の職員の方々や利用者の方々とのコミュニケーションは校内で得られない緊張感や責任感を持ちながら、日ごろの学習で学んだことを発揮する場となっています。

今後も、教職員一人一人が「何のために」豊かな自然とたくさんある地域資源を活用するのか、地域の方々と連携していくのかということを考え、これまでの取組をより充実したものにすることと共に、新たな取組を通して、児童生徒が学校で学んだことを発揮したり、校内では経験できない活動に挑戦したりする姿を引き出していきたいと思います。

９の項目では、保護者、教職員の肯定的回答は 80％を超える高い値となりました。日頃から、児童生徒の学習の様子、学校給食について、様々な学校行事での様子について東総合通信や学校ホームページで発信しています。進路だよりや保健だよりで、進路や保健に関する取組を伝えています。また、昨年度に引き続き、修学旅行後には児童生徒の活動の様子を見取れる写真を数枚、すぐーるを通して個々に発信しています。さらに、担任が中心となり、連絡帳で毎日の児童生徒の様子や変化を丁寧に伝えることで保護者の方々と共有しています。今後も引き続き、様々な方法で本校の児童生徒の様子や取組を発信し、保護者や地域の方々に本校の取組を知っていただき、児童生徒の学習や活動を充実させていきたいと考えます。

「つながり」校種間連携・接続により子どもを支える					
児童生徒			肯定的	否定的	わからない
10	小	好きなことやもの、やりたいことが増えた	71.4	5.2	23.4
	中高	自分の卒業後の生活を考えて、やりたいこと、学びたいことを伝えている			
11					
保護者			小学部	中学部	高等部
10	学校は、子どもが自らの進路選択・決定のために生活年齢に応じて得意なこと、興味のあることを広げ社会参加するための学習をしている		73.0 0 27.0	68.8 6.3 24.9	76.9 2.6 20.5
11	学校は、就学前や校種間、小・中・高等部の学部間での引継ぎを行い、学びの連続性や継続性のある授業を行なっている		64.9 2.7 32.4	62.5 0 37.5	66.7 7.7 25.6
教職員			肯定的		否定的
10	子どもが自らの進路選択・決定のために生活年齢に応じて得意なこと、興味のあることを広げ社会参加するための学習をしている		94.9		5.1
11	就学前や校種間、小・中・高等部の学部間での引継ぎを行い、学びの連続性や継続性のある授業を行なっている		86.3		13.7

【「つながり」校種間連携・接続により子どもを支える】

10 の項目は、教職員の肯定的回答は 90%を超える高い値になりましたが、児童生徒、保護者の肯定的回答は 60%台～70%台になりました。あわせて、児童生徒、保護者の「わからない」の回答が 20%台となっています。日々の学習の中で、児童生徒が「小さな選択」を繰り返すことに取り組みながら、自己理解を深め、将来の進路選択に向けた土台作りに取り組んでいます。クラススタディやライフスタディでは、活動内容を自分で選ぶ姿や、ワークスタディでは、道具の選び方や作業手順の工夫を自分で考える姿が見られます。今後も引き続き、得意なこと、興味のあることを広げながら「自分で決める経験」を積み重ねていくことで、児童生徒が自らの進路について考えるための取組を行なっていきたいと考えています。

11 の項目は、教職員の肯定的回答は 80%を超える値になりましたが、保護者の肯定的回答は 60%台となり、「わからない」の回答は 20%台～30%台となりました。各学部の入学前には、教員同士の直接的な引継ぎや個別の包括支援プランや個別の指導計画を活用し、児童生徒一人一人の「できる姿」や学んできた学習内容について引継ぎを行なっています。その引継ぎや家庭訪問、個別懇談会の保護者の方々とのやりとりを基に、今年度の個別の包括支援プランを作成しています。そして「現在の姿」や「身に付けたい力」を捉え、児童生徒一人一人「できる」ことを積み重ねられるよう教育実践を行なっています。今後も引き続き、個別の包括支援プランの内容の質的充実を図ると同時に、各授業、学習で「何を学び、どんな力を身に付けたのか」を次のステージに確実に引継ぎ、学びの連続性や継続性のある授業を行なっていきたいと考えます。

学校運営協議会より
・「学校には、こんなＩＣＴ機器あるよ」というアピールをもっとしたほうがいい ・デジリハの教室を参観日等に保護者向けに開放して、知ってもらい、“必要なもの”として発信していくことが大切だと思う ・クラススタディ、ライフスタディ、ワークスタディ、イーストスタディを保護者に向けて、丁寧に説明する必要がある ・学校でたくさんのことを学んでいる。その学んでいることを放課後デイサービスと共有していくことが重要であると思う。取り組んだ内容だけではなく、“感覚”の共有。例えば、２の項目の「人との距離感」は子どもたちが大人になったときにとても大切なことである。学校では、指導者との距離感も意識しておられること等を放課後デイサービスに知ってもらうことで、同じ方向で子どもと関わっていける ・学校と地域とのつながりの中、子どもたちが成長していく